

平成28年度 第3回小田原市社会教育委員会会議概要

- 1 日 時：平成28年12月22日（木）14：00～15：55
- 2 会 場：小田原市生涯学習センターけやき 視聴覚室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、角田委員、柏木委員、齊藤委員、瀬口委員、深野委員、益田委員
- 4 職 員：関野文化部長、安藤文化部副部長、杉崎文化部副部長、大木生涯学習課長、大島文化財課長、古矢図書館長、尾沢スポーツ課長、宮川青少年課副課長（事務局）
濱野生涯学習担当副課長、高橋生涯学習係長、松本主査、渡邊主査

5 傍聴者：なし

6 概 要

1 文化部長挨拶

関野文化部長が挨拶をした。

2 報告事項

- (1) 社会教育事業の結果及び予定について（平成28年8月～平成29年2月）
資料1に沿って、順次各所管の社会教育事業の結果と予定について報告した。
- (2) 「小田原市博物館基本構想」（答申）について
生涯学習課長より、資料2に沿って説明した。

【深野委員】 市のホームページで見てきたが、構想を聞くのは初めてだが、保存と収集するのは分かるが、その補修体制をどうするのか。物は必ず劣化する。当然、こういう歴史的なものを収集すると、集めた段階で何らかの毀損されている部分があるとか、それから、本物は展示できないが、レプリカなら展示しようとか、そういうものがあるので、そういうことも含めた補修体制というのも、展示と収集・保存のもう一つの機能として非常に重要だと思う。これは、何が問題かという、やはり専門家がいないとどうにもならないと思う。絵の補修も、やはり素人が触ると怒られてしまうので、もちろん、こういう博物館だとそうなると思うが、そういう体制を一体どう作るのか、どう保障していくのかと、それが無いと今後の展開ということが非常に難しいのではないかと。もう一つは、こういう入れ物を作る話になるが、入れ物も大事だが、それと同じ重みというかそれ以上に、どう運営していくのか、運営の中の重要な要素が、博物館を場にして、何を企画して、どう博物館が活動していくのか、市民とともに作るを書いてある

が、言葉は非常にきれいでいいが、理想的な言葉だが、具体的に市民とともにとは、市民がどういう役割をして、博物館の方が専門性をどういうふうに発揮しながら、この企画・展示なり、収集なりをしていくのか、そういうソフトウェアの部分が、構造としてもっと出てこないか、また入れ物を作って、集めて、ためて、終わり、になってしまわないかなという心配がすごくあるが、その二点いかがか。

【生涯学習課長】 まず、一点目の補修については、当然、構想の「収集・保管」の中でしっかりやっていくという位置付けではある。具体的にその辺の所は言及していないが、基本的には、この後、後期基本計画等の中ではしっかりと位置付けをしていく。実際に、今も、レプリカ作製や補修は、学芸員を中心に、外部委託を含めてやっている所である。やはりそれを、一元管理していくような形になっていくかもしれないが、その辺はしっかりと整えていきたいと思う。次に、市民とともにという所だが、ここが一番のポイントであると思っている。やはり教育機関であるので、ここの中で展示を見ていただくだけでは、やはり一回見れば、そこで終わってしまうので、この中で、特別展なり、学芸員が開く講座なりを市民がそこで受けていただく、さらに、その学習活動が、サークルみたいな形になって、そこでその市民自身が、引き続き研究・調査を行っていただいて、その成果が博物館に還元される、ということが必要ではないかということがあるので、そうした意味で、市民と一緒に育てていきたいということがある。平塚市の博物館等がそうした手本というか、評価が得られている所があるので、そうした所を参考にしっかりやっていきたいと思う。

【深野 委員】 建物を建てるのに、ホールの話もあって、お金も大変だと思うが、やはりその後の運営費用、例えば、補修体制を企画する専門の学芸員の確保も含めて、やはり運営に関する人件費の予算確保も、是非きちんと働きかけてやってほしいと思う。直営だというのは分かるが、市長が変わって方針を変えて、どこかの市長みたいに、もう文楽はいらないみたいにして、出さないぞみたいになると、ちょっと困るので、やはりそういうのは、逆にいうと直営のリスクでもあると思うので、どうギャランティーしていくのか、という所が大事なポイントかなという気がする。

【生涯学習課長】 この直営の所は、これは策定委員会から出た答申ということなので、この辺は、もう一度市の方でも、本当にここでこうした形でいくのかは、今後検討していきたいと思う。

【齊藤 委員】 これはエコミュージアムの発想で、独自の地域文化をもつ小田原ならではの取り組みになるのではないかと期待を持った。しかし立派な建物ができたとしても、今後の運営のあり方が一番問われるのではないかとと思う。特

に、運営面における人的支援・育成で、来てくれる人たち、学ぶ人たち、伝える人たち、人をつないだり、育てたりするが、社会教育委員でも重要な課題になる。学校教育では「総合的な学習の時間」などで小田原の文化を学ぶなどの成果を市役所の下でよく展示している。学校教育の中でこういったことをどの程度取り入れて、今後強化していくか、その現状と今後の方向性が求められる。また、社会教育団体あるいは観光ボランティアなどの団体が多数あると思うが、その辺の現状と今後がどういうふうに描かれるのかを見える化していく必要がある。こうした試みは、学校と地域とか、学校と社会をつなぐという意味で社会教育の方向性にも成り得るのではないかという期待を持った。

(3) 第二次小田原市子ども読書活動推進計画の策定について

図書館長より、資料3に沿って説明した。

【有賀委員】 質問ではないが、私も図書ボランティアの活動をしているが、現在、小中学校では、司書派遣制度が導入されて、各学校、週2回、司書の先生が来ている。そんな司書の先生の方で図書室の環境も整って、書架の表示とか分かりやすく、ディスプレイなどもかわいらしく仕上がっている。中学校では常時図書室が開放されているわけではないが、小学校で私が図書ボランティアの活動に行くと、楽しそうに図書室を活用している子どもたちの姿が見られる。司書の先生の勤務日と図書ボランティアの活動日を合わせて、協力・連携して活動を進めている学校も多いと思う。私もこれからも、子どもたちにとって、本に親しむ機会が増えて、楽しんでもらえるように取り組んでいきたいと思っている。現在、学校図書ボランティア連絡会の実行委員をしているが、市内の小中学校の図書ボランティアを対象とした学習会を年に3回開催している。古矢館長にもお世話になっている。先日、小田原短期大学の図書館見学に行ってきた。図書ボランティア、約40名くらいの参加があったが、本当に小田原短期大学の図書館は、クリスマスのきらきとした雰囲気の中で、仕掛け本とか、紙芝居とかたくさん展示されていて、楽しんでもらえたかなと思う。やはり子どもたちだけではなくて、図書ボランティアのお母さんたちにも、本の楽しさだとか、読み聞かせの大切さだとかを伝えて、図書ボランティア同士の交流の場もこれから大事にしていけたらと思っている。先ほど、古矢館長からも話があった1月29日にかもめ図書館で予定されているすずの会主催の藪内正幸さんの講演会についても、図書ボランティアの学習会の時に紹介し、ちらしを配布した。地域の読み聞かせのボランティア、すずの会の代表者には本当にお世話になっているので、これからも様々な場面で協力いただきなが

ら、勉強をさせていただきたいと思っている。

- 【深野委員】 ヤングアダルトの定義はどのようになっているのか。
- 【図書館長】 資料の本編の方の19ページに用語解説がある。ちょっと一般にまだ浸透していない言葉かと思うが、主に中高生ということで、「YA」というような略語で使うことも多くなっている。
- 【瀬口委員】 まさしく乳幼児、0歳児と4歳を育てている母親だが、ある時、計算したら、子どもが生まれた瞬間から7歳、小学校に入学するまでに毎日20分子どもに読み聞かせをしたとしても、子どもの人生において、私が読み聞かせをしてあげる時間は、1ヶ月満たない。だから、まだ小学校にあがるまでしか、「ママ、ママ。やって、やって。」とは言ってこれないので、その後、こっちが寄っていても、もう友達がよかったり、いろいろなことがよかったりするの、触れ合える時間はすごく短いから、大切にしたいと思いつつも、何か自分の気持ちが、ざわざわしていたりしたら、読んであげられなかったりとか、大切な時間を削っている、無駄にしてしまったなと思うこともたくさんある。本を探しに行きたくても、忙しかったりとか、いろいろすることもたくさんあるので、周りの友だちとかに話したら、前は、小田原市はブックスタートがあったが、とりあえず、生まれた瞬間に本がほしいねと、やはり、ウッドスタートもよいが、ブックスタートも是非ほしい。(子どもの) 検診に行くと、待ち時間がすごく長いので、こういう時にボランティアさんが来てくれて、本を読んでもくれたら、子どものためというより、まず母が癒されるなと思う。癒されたら、「この本、面白かったなあ。」家で読んであげようかなという気持ちになるかなと思う。そういう子どもが小さい時、検診とか子どものことでいろいろあるので、そういう所でボランティアさんと連携して読んでいただける機会がないかなという要望です。
- 【柏木委員】 私の感想だが、家の孫、4歳児の男の子が幼稚園に通っているが、金曜日になると、幼稚園からもどれでも持って行っていいよということで、いつも孫は2、3冊本を借りてきている。これは、とても素敵なことだなと感心している。母親が基本的には本を読んでいるが、私は息子に、お母さんの読み方とお父さんの読み方は違うから、同じ本をあなたがたまには読んであげなさいと、言うようにしている。以前、お父さんのための読み聞かせの講座か何かがあったように、それも1回くらいしかなかったと思うので、もう少しお父さんにも本を読む、「こういうことで読んであげたらいいんだよ。」というきっかけづくりにでも、講座をもう少しやっていただけたらいいなと思う。それで、幼稚園のうちからとか、たまたま幼稚園だが、そういう所にもっと働きかけていくことも、子どもが読む週間になっ

ていくのかな、基本的なこと、とても地道なことだけ大切なことかなと、是非そういう施設にそういう啓発をしていただけたらと思う。

【益田委員】 私は、小田原市の図書館協議会の委員もしているが、それと神奈川県の方でも読書推進協議会の委員を今期やっている。その中で、資料の中で先ほど出たブックスタートだが、神奈川県内でもブックスタートをやっていない市が数少ない。やはり中核都市であるのに、ブックスタートをやっていないというのは、ちょっと昔はやっていたが、本当は自分の体験談として、私は3人子どもがいて、3人ともブックスタートで本をいただいていた身なので、あれがなくなってしまったのは、母としても残念だなと思っている。その県のデータとしても、ちょっとブックスタートをやっていない市が少ないということを知ったので、是非2冊は無理かもしれないが、1冊とかでもいいので、是非本当に読書を大切だと思っている母親が少なくなっている、半ば強制的にでも、家に本を置くということが大切だと思っていて、やはりタブレットで画像を見るのと、絵本を開くのと、全く違うので、是非社会教育委員の立場からしても、ブックスタートをもう一度やっていただきたいと思う。要望である。

【図書館長】 大変うれしい意見ばかりで、ありがとうございます。ブックスタートについては、9月4日の講演会の意見交換でも、非常に要望が多かったということで、やはり先ほど意見があったように、手元に本がある環境をどうやって作っていくかという、とにかくどれを読もうかではなく、まずそこに本があって、手に取れる環境を作っていくことが非常に大切と考えている。提案いただいた、特に検診の待ち時間等についても、今、健康づくり課とも連携をいろいろしてきている所があるので、前向きに考えていきたいと思っている。また、こゆるぎ幼稚園も素晴らしいことをやっているというお話をいただいた。今、小田原市内の保育園等に、例えば図書館のリサイクルというか、市民の方から時々お寄せいただいて、すでに図書館で蔵書があるものなどはリサイクルに回したりしているので、そういった本も活用できないかなとか、そういう相談を保育課と進めたりしている所があるので、これもすべての所に一遍に新しい本を配布するのは難しいが、こういったお寄せいただいた本などの活用を進めていきたいと思っている。また、パパの読み合わせは、今年度初めて開催した。第1回目だったが、やはりお母さんに申し込まれてしまったから来たというような方もいたが、皆さん楽しんでいただいた。最近、イクメンとか、男の方も子育てに積極的に関わるといって方が増えているというので、うまくなくてもいいから、お父さんが自分で読んであげることが大切だということが、講師の方からも励ましていただいたので、この事業もできるだけ機会を捉えて継続して

いきたいと思う。また、意見募集もお知り合いの方にお声かけいただき、多数意見を出していただくようお願いしたい。

【角田委員】 5年生になる孫が母親と一緒に図書館によく行くが、つい最近、図書館の話が出て、「図書館にいい本がたくさんあるよ。」と言ったが、「読みたい本がないよ。」と言われた。それがどんな中身かは、中身の話はしなかったが、ごく最近の話である。そういう話が出たので、意見まで。

【深野委員】 感想だが、私は仕事人間だったが、子どもが小学生になるまで寝かしつけるのに本を読んでいた。今から思うと、父親がそういう場を設けるということは、童話とか児童書というものが、どういう意味を持っているのかというのを考えるという意味では、非常に役に立ったのかなと思う。仕事人間だからこそ、そういう場面が人生の中に、30代、40代にあるというのは、男にとっても非常に大事だと思うので、首に紐を付けてでも、パパの講座に行かせるようにリードした方が、いいんじゃないかなと思う。

【齊藤委員】 感想である。この割合（読書をしない子どもの割合）が、10年間の中で、非常に増えている、2倍になっているという問題は、たぶんICT（情報機器）に影響があると思う。昨日読んでいた本で、「テレビやスマホに子守をさせるな」とのメッセージがあり、読書を促進していた。実態として親子関係と読書に関連があると思う。一つの要因として、働く親が増えていて、非常に親が忙しくなっていること、もう一つの要因として、貧困という問題があって、本を買う余裕がないと、図書館に行く余裕がないことが影響しているのではないかなと思う。そこで、シニアの生きがいと伝統文化の観点から、時間的にも余力がある小田原市の退職された方や、子育てが終わった方が読み聞かせを促進するのはどうか。これは、非常に多くの自治体でも取り組まれていることである。ボランティアの中でも、読書ボランティアというのが一番とつきやすい領域にもなる。健康長寿医療センターでは、シニアの読み聞かせグループということを、積極的に育成して、それを孫育て、自分の孫ではないが、子どもたちに対して、読み聞かせすることによって健康の維持を図っている。声だしがあるとか、身振り手振りとか、読みやすさということを工夫するとか、そこでコミュニティを作るとか、そういった検証もすでに出されている。そういった意味でも、場を活用し、余力のある方々にもっともっと積極的に発信していただくという方策があるのではないかなと思う。

3 協議事項

今期の研究調査テーマについて

生涯学習課長より、資料4・5に沿って説明した。

【木村議長】 本日の会議は、今期のテーマを決定したいと思っている。今、事務局から説明があったように、前回の社会教育委員会議の中から皆さんの方から出た意見が右側の方に載っている。それをまとめて左側の方に今回のテーマとして7つの分野に分けて事務局の方で整理をしていただいた。これについて本日、できたらテーマを決めていきたいと思っているので、よろしくお願ひしたい。それでは、皆さん、意見がありましたら、よろしくお願ひしたい。

【有賀委員】 先月の11月11日の社会教育委員の連絡協議会地区研究会で川崎市に行ってきた。川崎市の研究テーマは、「地域をつなぐ社会教育」ということで、当日は地域教育会議の実践や、寺子屋事業の実践等についての事例発表があった。昨年度の川崎市のテーマを確認したところ、「地域をつなぐ社会教育施設を求めて」となっていて、今期は前期を踏まえてのテーマとなっていると伺った。今回のテーマの方が、社会教育を広く捉えているのかなと感じた。小田原市のテーマ一覧を見てみると、具体的なテーマと、社会教育を広義的に捉えているテーマとに分かれているなど感じた。ただ、この7つのテーマが出されているが、意見等を見てみると、かなり共通している部分が見受けられる。例えば、コーディネート機能の強化とか、コーディネートする人材の育成支援あるいは仕組みづくりの必要性などは、同じ意味合いと捉えられる。また、地域に誇りを持てる子どもの育成とか、地域のプライドとして子どもたちに根付かせたい、このあたりも共通しているかなと思う。社会教育委員として何ができるか、といったような意見も重なっている。私自身としては、これらの共通事項を考慮して、前期答申を踏まえ、少し具体的なテーマを考えていけたらなと思っている。地域という言葉が、キーワードになるのかなと思った。

【木村議長】 何かいいテーマはないか。

【有賀委員】 前回は「地域における学びの場のあり方」だが、やはり1番あたりがとっつきやすいかなと感じる。

【深野委員】 私も有賀委員と一緒に川崎の研究会に参加したが、ずっとこの場で議論してきた中で、やはり非常になかなか乗り越える壁が高いなと思うのが、地域と学校なんだと思う。特に地域に学校を開放するということの制約、時代が時代だから、セキュリティの問題も含めて、難しいとか、そういうことがある。地域の子どもの居場所とか、そういうことがあるが、例えば、うちの組などは子どもは家の隣の兄弟二人しかいない。後は年寄りしかいない。自治会そのもの全体でみても子ども会がない状態になってしまっていて、何かその、子どもだけを取り上げるというのではなくて、やはり地域全体の中で子どものことも議論する、お年寄りのことも議論する、

防災のことも議論する、そういうことがやはり必要なのかなという気がするので、1番とか、3番なんかも絡んでくるし、6番なんかも絡んでくるようなそういうテーマがいいのではないかと思う。特に社会教育委員、今日は出席していないが、学校の校長先生も出席しているので、やはり本音で話していただいて、学校側としてはこういうことならできるとか、ぎりぎりここまでがんばってみるとか、何かそういう意見を聞いたうえで、社会教育としての地域と学校の連携はどういうことが可能なのか、というのを具体的にアウトプットとして示せればいいのかと、それが課題という形で示すことになってしまうかもしれないが、それはそれで、より具体的な課題になっていけば意味があるのかなという気もするので、そういう切り口で議論できればいいのではないかと思う。

【益田委員】 前回の答申が学びの場を話し合ったので、今度は、場ではなくて、私が一番大切だと思っているのは、3番の人材育成だが、地域の人とか、学校もそうだが、すべてをつないでいく、つなげる人材を作っていく、人材を作っていくのか、人材によってつなげていくのかは分からないが、すべてを人と場をつないでいくコーディネートが、今度は社会教育委員会議でできるといいかなと思っている。私も1番というか、先ほど有賀委員も言ったように、右側を見ると、どのテーマでも共通する所があるので、1番を中心にして、そこに入れ込んでいけたらいいかなと思う。

【瀬口委員】 私も1番と3番に最初の議題の地域の博物館が組み合わせられないのかなと思う。これ以上、小学校や中学校にこちらから「こんなことしてください。」というのは、難しいと思うので、逆に私たちが、地域のおじいちゃん、おばあちゃんとか歴史を知っている方々を集めてきて、放課後、塾とかない日に、ここに来たらこういう地域のことを学んで一緒にガイドしませんかという教室を開催できないかなと思う。また、小田原には結構海外の方もいて、英語が堪能な子は英語でガイドができるようになって、小田原駅から小田原城まで英語で案内していくとか、そういうことができないかと思う。私は大分県だが、大分県は地元で中学生にガイドさせている。結構それが評判で、石仏に行ったりとかいろいろしているので、そういうのが小田原でもできないのかなと思う。学校には、こんなことしますよというちらしを配ってもらって、人を集めてもらう。学校の中でするのではなく、知っている人を集めてきて、場所を開催する所までして、後は、皆さん一緒にやりましょうというようなことができれば、最初の博物館とも重なってくるのかなと思う。

【角田委員】 全体的に見れば1番かなと思うが、昨年、地域で三世代交流をやった。年齢の高い私たちと、年齢の若い小中学生と、それから中間層のお父さん、

お母さんたちとの交流だった。はじめてのことだったので、そんなに大勢は集まらなかったが、大事なことだなと思った。これが根付いていけばもっと大勢のおじいさんやおばあさん、それからお父さん、お母さん、それから子どもたちが集まってきて、いろいろなことができるのではないかなと思う。そういうことが、すごく立派なことを地域の中で何をしようとか、こういうことをしようとかということではなくてもできるのではないかなということ考えた。それが学校の間を借りてやっているのだから、地域と学校との交流になるのではないかなということと、深く考えると、地域と学校との触れ合いができるのではないかなと思った。それと地域と学校との連携ももっと深めていけば、できるのではないかなと思った。このテーマで考えていくと、やはり1番ということになるのかなということと、つい最近、また身近なことになるが、地域の学校からパトカーが出てきた。私、パトカーに先導される形ですつと行ったが、目的地に行ったらまた戻ってきたら、白バイがまだ学校にいた。学校の先生と廊下で話をしているのが見えたので、次の日、孫に「学校で何かあった？」と聞いたら、その学校の先生に何かあったわけではなく、市内の学校で何かあったらしく、お巡りさんが学校を見回りしていたとのことだった。そういう話も、身近に入ってくると、いいかなと思った。そういうことがあるからかもしれないが、学校を開放するということがなかなか難しいのかなと一瞬思った。学校を開放するということがなかなか難しくなってくるのかなと思った。地域の中に開放すると難しいのかなと思った。

【柏木委員】 私も、7項目のうち、1番と4番がどうしても捨てがたい。1番の中で、地域と学校との連携をやっても、ここに参加できない子どもたちがいっぱいいるので、その子たちのこともきちんとこの会議で位置付けができて、行政の方で取り組みができたらいいなと思っている。今年、子どもたちに個室をさせないということで、酒匂でチーム・そよ風が夕飯を月に1回、後マロニエで他の所がやっているようだが、そうやって食事を、私も「六彩会」のヘルスメイトだが、夕飯作りに手伝いに行っているが、やはり一人でご飯を食べなければいけない子どもたちがいるということ、一部の子だが、私たちの中で忘れてはいけないのかなと思う。私は更生保護もやっていて、少年院の子どもたちとも触れ合うことがあるが、やはりお腹がすくことが悪さをするきっかけになってしまっているということを実感的に聞いているので、やはり食を楽しくすることが大事かなと思っている。家庭教育の中でそれができなくて、それを地域で支えていく、このチーム・そよ風、青少年課か、許可をいただいて、支援をしていただいているようだが、それは酒匂とマロニエだけで、後、もう少しニーズがあ

る地域もあるのかなというようなことも感じるし、ある図書館で「学校にもどこにも行きたくなかったら、図書館においでよ。」というメッセージで、自殺防止や一人にさせないということを行政の方で発信している所があって、そういう孤独にさせないとか、死を選ばせないとか、そういうためにも1番のテーマで結構だが、地域の中に子どもたちの居場所を確保する取り組みができたらいいなと感じている。

【齊藤委員】 今の話も非常に共感する。今、学校教育の教育現場では、特別の支援を必要とする幼児、児童、生徒に対する配慮を教員養成課程で強化する方向にある。学校教育の中では、外国人も増えており、障がいのグレーゾーンの子どもたちも増えている。こうした現場で学校の先生たちだけではやりきれないという声がある。一方で、地域の人たちが学校に押しかけることへの教員の嫌悪感というのも現実にある。学校の先生たちの現場の苦しさも知らず、ずかずか入られるよりもちゃんと学校を理解した人でないと、入ってほしくないという本音もある。その辺が社会教育をつなぐ役割だなど思っている。そこでコーディネートの必要性が問われるようになった。これまでコーディネートとか、リーダー養成というのは、どこでもやってきたことではある。コーディネーター養成講座などは、正直言うと、どこもうまくいっていない。コーディネーター養成講座とか、リーダー養成講座は、具体的な中身があった方がいいと思う。前回も話したが、小田原来ると羨ましい。何が羨ましいかというと、伝統文化がそこに根付いているからである。小田原市には伝統文化、お祭りや孫世代に伝えなければいけないことがいっぱいあるという、そういう材料に溢れている地域は、県内では特異な地域性がある。今後、学校ではなくて放課後支援、そこで放課後支援をしてくれる人材育成がより必要となる。太鼓とか音楽とかスポーツなど地域で大切にしてきた伝統文化・伝統行事を孫世代に伝える人材を育成するとか、何か具体的な役割があった方が進めやすいと思う。例えば、先ほど読書の例があったが、本とかもきっと小田原ならではの文化があるのではないと思う。それを地域の人たちが子どもたちに伝えるというようなこととか、何かを伝えるといったことが、放課後支援のあり方の中に入ってくると、一般的な放課後支援ではなくて、小田原ならではの地域性を活かして、小田原でこういうことを学んだという人たちが小田原を出た後も、また小田原に帰りたと思うようになるのではないか。

【笹井委員】 前回、欠席して申し訳ない。前回、欠席して意見を申し上げるのもどうかと遠慮していたが、一つ質問があって、学校教育及び学校と地域の連携というのは、文化部の方で所管されているのか。

【文化部長】 基本的に、今、学校側の視点では、地域に開くということで、学校の経営

的な所については、いわゆるコミュニティ・スクール化である。これは、後5年間で全校にしますということで、学校を地域に開きましようという形で、それは教育委員会の方針として立てて動いている。もう一つは、市長の施策の一つだが、言葉で言ったら分かりにくくなるが、スクール・コミュニティということで、地域で小学校区くらいのエリアを一つの単位として、地域で子どもたちを支えましようというような取り組みもしている。その両側の所で、どのような接点になるか、具体的な取り組みができるのか、ということを検討している所で、今、質問の所の地域とどのようにするのかという答えとしては、考え方は両側からいって、特に強くなっている、はっきりと出ているのが、学校が開きますよという姿勢をきちんと出している、その辺の所がはっきりと言えらると思う。文化部長が所管なのか、どうなのかという時には、スクール・コミュニティの所は、どちらかという子ども青少年部の方の所で、今やっている部分があたるが、居場所ということであるが、どこが所管なのかという、それぞれの所がそのポジションで今やっているという所である。

【笹井委員】 学校教育に関わりがないと、結局、学校をどうするかということも一つの議論の柱になるので、教育委員会がやらなければいけないのかなと一瞬思ったので、つまりこの1番目の提案が非常に魅力的なのだが、政策化というのがどこができるのかなと思って申し上げたが、今の文化部長の話でよく分かった。それで学校側は、コミュニティ・スクールとか、学校運営協議会を作ったりとか、いろいろなことで学校を中心として広げていくという取り組みをやっている所なので、それはそれでそういう努力をしてほしいと思うが、地域の側として、どういうアプローチをして、学校支援ボランティアとして学校にどういうふうに入ってもらって、学校側とのコーディネートをするかという問題が確かにあると思うので、もし、行政的にあるいは施策として非常につながるのであれば、私は1番目のテーマが一番いいと思う。ただ、結構真正面から議論をすると、どういうふうに取りまとめるかということで、学校側と地域側で結構もめる、ずれることがあるので、切り口を連携とか協働とかそのものにする、結構まとまらなくなるのではないかと危惧している。もしそうだとすれば、もうちょっと切り口を変えて、例えば、先ほど話があったように、学校の子どもの放課後の時間や活動をどういうふうに充実させるかみたいな所で、そこに小田原が持っている地域の資源とか、人とかが入り込んでというような切り口を変えていかないとまとまらないのかなと思ったので、非常に社会教育的あるいは生涯学習的な切り口でやるのがとても大事なかなと思った。もう一つは、これは一つの案だが、私から見ても、先ほど齊藤先

生から話があったが、小田原は他の自治体から比べれば突出して歴史的な文化資源が多い所だと思うので、それを熊本城との協力で結構テレビでも有名になったし、私に言わせれば、鎌倉と並んで小田原は関東では非常に資源がたくさんある所だと思うので、それを子どもたちだけではなく、大人も伝統文化を大切にするというか、一歩進めて今の時代に活かすみたいな、そういうものが小田原らしくていいのかなと思った。批判するわけではないが、博物館構想の話聞いていて、文化財保護法には保存と活用ということが書いてあるが、活用の視点が乏しいなと思った。博物館はどうしても教育委員会の所管になってしまう。教育委員会だとアカデミズムを重視するので、そこに焦点をあてるとちゃんと保存していいものは残していこうという観点になるだろうと思うが、実はそれだけでは文化財保護法の観点からいっても不十分で、活用をちゃんとすることが大事だし、その活用することが地域づくりにとって大きな意味を持つと思う。せつかくこの基本構想を活かしつつ、もう一歩地域づくりの観点から、大人も子どもも、この伝統的な文化を、小田原が持っている文化資源を、今の時代に活かすようなことができればいいなと思っている。

【木村議長】 今の学校の開放というような形で、これは、先ほど文化部長から話があったように、3つの組織がコミュニティ組織とスクール・コミュニティともう一つある。結局、私なんかはほとんど地域コミュニティの方の組織を作っている。はやく言えば、社会教育委員というのは、各地区には公民館があって、それが地域の馴れ合いをずっと伝えてきているという形で、役割としては、もう私は社会教育委員のやり方は、コミュニティと一緒にできている。今もリーダーの話も出たし、そういう中で、小田原市は初めの頃は、マロニエみたいな会館を各地区に6つ作ろうと、今できているのが3館しかない。これ以上、財政がひっ迫している中で、そういうものを作る余裕はないとなると、公民館が古くなってくるのは、そういう集まる場所がないと、それでは最終的に何を考えたらいいかというと、やはり学校だろうと、地域の中には学校、小学校があるので、その学校を開放してくれないか、一つの教室でも空いた時点で、これから少子高齢化で子どもが段々少なくなってくると、特に有賀委員の豊川の分館もいつまで持つかわからない、地震が来たらすぐ無くなるような感じのものを今でも使っている。それを代替をしようといっても、もう財政がこういう状況になってきているので、建物はなかなか作れないとなってくると、それでは何がいいかということ、やはり学校かなという形で、文化部長が市民部にいた時も教育委員会といろいろ話をしてもらって、今すぐに作るのかではなくて、子どもが減ってきて、空いた時点で、セキュリティを何とかしてもらって、そ

こへ地域の人が入って、会議をやってもいいし、いろいろなことをやっていこうという形でやっている。それで一番私がいやなことは、学校側は、もう自分も手に負えないから地域と言ってくる。何かあると「地域、よろしくお願いします。」と来るので、地域もリーダーもそうだし、なかなかボランティアというのも集まってこないのが、今の現状である。その中で、そういう形でモデル校でもいいから作ってもらいたい。どこか教室を使って、地域がそこへ入って、いい環境ができていろいろなことができるようになってくると、他の地域もいいなということになってくるが、まだそういう段階でもないの、絵に描いたもちで、今の所はにっちもさっちもいかないという所である。そういうことで、地域と学校の連携というのは、国も言っていることであって、もうどうにもならないから地域も一緒になってやってくださいよということで、そういうことを考えると、地域と学校の連携についてという題目でもいいし、また先ほど皆さんがお話になったように地域のリーダー的な人材というの、これもなかなかいないと、いつまでやらされるのかなということで、一つの所に飛び込んだら、もう足を抜くことができないと、そこにどっぷり浸かってにっちもさっちもいなくなって体が壊れてという所か。やはり、お父さん、お母さんも勤めているし、なかなかこう若い人が入ってくれないと、定年になって子育てが終わって、それから皆さんに入ってもらおうとある程度の年齢がいつてしまうので、そういうことも考えていく中で、地域のリーダーというの、一つの目玉の中に入ってくるのかなと思う。そういうことを考えると、1番をお題目にして、副題として地域のリーダー、3番でもいいし、子どもの居場所づくりを加味して、一つのものにするのではなくて、副題的なものをそこに作るができるか、そうすれば、皆さんの話し合いもいろいろな意見が出てくると思う。地域と学校の連携についてという一つのお題目にしてしまうと、何か進んでいかないのかなと思うので、できたら副題を作って、そうすればいろいろな角度から意見が出てくるのではないのかなと思う。その辺で、事務局どうか。

【生涯学習課長】 今の話の中でいくと、やはり地域と学校というのは、キーワードになると思う。そうすると1番の所になるが、今、木村議長が言われたように、1番の所はかなり広い所があるので、その切り口とういうか、視点という所が、やはり2番、3番、4番あたりが絡んでくるのかなと、その辺を切り口という形で、最終的にどういう提言になるかは別にして、取っ掛かりとして議論を進めていくのも一つかもしれない。

【木村議長】 皆さん、そういう形でいかがでしょうか。

【笹井委員】 基本的に賛成である。学校、地域、連携という先生方の負担を減らすた

めにボランティアを導入するのもそうだし、あるいは学校の子どもたちをいろいろな教育活動、部活も含めて充実させるのも、学校、地域、連携だし、先ほど話をさせていただいたスクール・コミュニティは、学校の施設を地域の人に開放して、地域の人が生き生き活動するし、子どもとも交流するというようなことで、焦点のあて方によって全然変わってくるので、木村議長が言うように、どういう切り口をするかという所がすごく重要になってくるように思うので、その辺は是非、事務局の方で検討いただきたいと思う。

【木村議長】 そういう形でこれから議論を進めていきたいと思うが、皆さん、いかがか。よろしいか。何かもうちょっと、こうやった方がいいよというような意見でもあるか。先ほど言った本題と、後、副題的なものをちょっと入れて、その中で皆さんの意見でいろいろなことが出てくると思うので、その中から一つまとめていきたいなと思っているので、是非、よろしく願いしたい。

【深野委員】 (前期の) 答申を改めて見てみると、答申の3(1)の学びのコーディネート機能の強化と(4)の学びの拠点機能の整備、地区公民館、学校等との連携と、まさしくそのことが書かれている。ただこれは、ある意味では課題設定をただだけの答申であって、それでは具体的にどうするんだという話までは突っ込めていないし、この問題を解決するのは、そう簡単にはいかないということも分かった上でこういう抽象的な表現にせざるを得なかったという所もあると思うので、やはりここの所を真正面にやるとなかなか大変だという笹井委員の話もあったが、ある意味、真正面からやらざるを得ない。そうしないと、社会教育とか地域の学びの場とかという問題はそう簡単な話ではないし、やれることは小さなことから、尊徳さんではないが、積小為大でいくしかないわけで、そういうテーマはいったい何からやっていけばいいのかということを考えていきたいと思う。地域という意味で言えば、やはり、祭り、身近な所で言えば、例えば、来月、どんど焼きがどこでも小田原は盛んにやられているが、どんど焼きをやるとお年寄りが孫を連れて出てくる。そういう場があれば出てくる。それで世代間を越えた集まりが出てくる。ただそれは晴れの場でしかないので、今、地域の自治会なんかができるのが、やはり晴れの場づくりというか、維持するのが精一杯という所だと思うので、日常的な活動としてどういうものを設定して、地域として公民館だとか、学校だとか、そういう場を活用しながら、何ができるのかということを考えていきたいなとか、いけたらいいのではないかと思う。

【木村議長】 後は、深野委員が先ほど言ったように、学校の先生が委員の中に入ってい

るので、是非、学校の先生も出てもらって、学校側の話も聞きたい所があるので、是非、事務局よろしく願います。それでは、皆さんの意見の中で、1番と、後は副題として、事務局におまかせするので、それを次回から、会議の中で皆さんの意見を聞いていきたいと、それで、最終的には、平成30年までよろしく願いたいと思う。それでは、次回の会議までに今の1番と3番、4番でも結構なので、いろいろな皆さんの意見を聞き、一つにまとめていきたいと思っているので、是非よろしく願いたい。

(有賀委員から資料に基づき、「放課後こども教室」について話があった。)

【木村議長】 それでは、事務局、よろしく願います。

【事務局】 今後、テーマについて議論を進めていく上で、何か資料等、必要なものがあれば、事務局まで連絡をいただければ、次回の会議までに用意させていただく。次回の会議について、来年の2/10(金)午前、2/14(火)午前、2/17(金)午前の3日間、会場を押さえてあるが、本日の午前に神奈川県社会教育委員連絡協議会から2/10(金)の午後に相模原市で地区研究会開催の通知が来たので、2/14(火)午前か2/17(金)午前のいずれかの日に会議の開催を決めさせていただきたい。また、神奈川県社会教育委員連絡協議会の地区研究会開催の通知については、後日委員の皆様へ送付させていただく。

【木村議長】 事務局から次回の会議の日程、2/14(火)午前、2/17(金)午前ということで、皆さん、都合のよい日どちらか、いかがか。

【木村議長】 それでは、2/14(火)午前の開催とする。

【事務局】 それでは、2/14(火)午前10時から開催ということで、よろしく願いたい。引き続いて、神奈川県社会教育委員連絡協議会から県社教連の会報誌である「神奈川県の社会教育委員活動」への寄稿依頼があった。この会報誌については、神奈川県のホームページに掲載されている。本日卓上に配布した資料にその閲覧方法が記載されているので、参考にご覧いただきたい。寄稿については、委員の皆さんのうち1名の方に自身の社会教育委員としての活動などについて、概ね400字詰め原稿用紙4枚程度の執筆依頼である。県内の各市町で順繰りに回ってきており、4年おきくらいに回ってきている。前回は、平成24年に委員の方に執筆いただいている。どなたか、1名の方に執筆をお願いしたい。

【木村議長】 事務局から話があったように、寄稿しなければいけないということで、どなたか書きたいという方は、いないか。もし、いないようなら、私の方から深野委員を指名したいと思うが、いかがか。

【委員】 異議なし。

【木村議長】 それでは、資料等もあるようなので、深野委員、よろしく願います。以上で本日の議題はすべて終了した。これをもって、閉会とする。長時間ありがとうございました。